

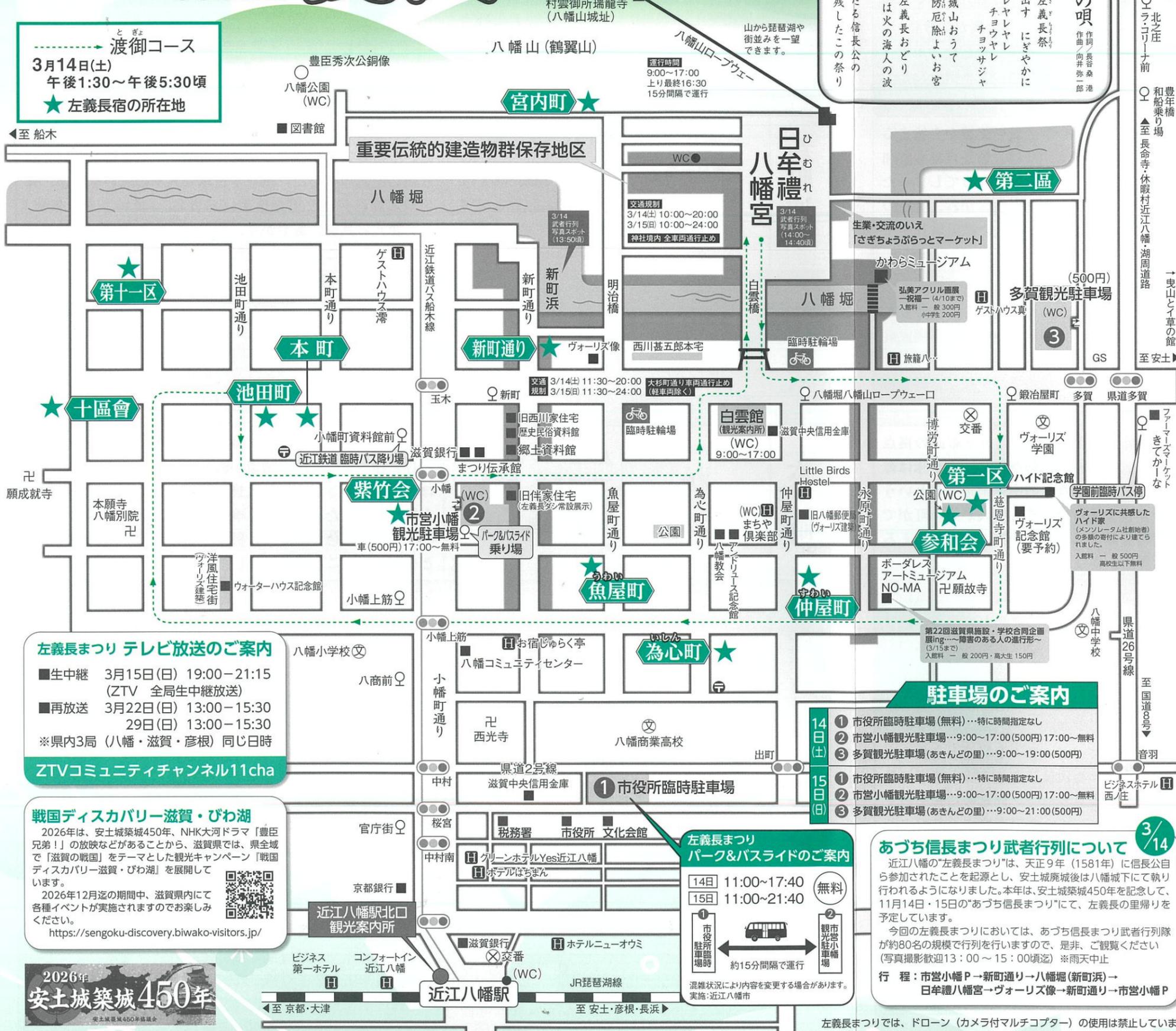
2026年
令和8年
天下の奇祭

左義長まつり

ご案内

近江八幡左義長保存会HP
https://www.sagicho.net/

とぎよ
渡御コース
3月14日(土)
午後1:30~午後5:30頃
★左義長宿の所在地



左義長祭の唄

作詞 長谷川 幸一
作曲 向井 勇一

弥生半ばの左義長祭
山車がねり出す にぎやかに
ソノレヤレヤレ
チヨッサジャ

日牟禮八幡城山おうて
火防厄除よいお宮
天下奇祭の左義長おどり
馬場は火の海人の波

おどり出したる信長公の
由緒残したこの祭り

左義長の起源といわれ

左義長まつりは全国的には正月の松飾りや注連縄(しめなわ)を集めて焼く火祭りの行事として行われます。近江八幡の左義長まつりは江戸時代には1月14日・15日に執り行われていたようですが、明治時代に入ってから、太陽暦の採用に伴い3月に変更され、昭和40年代からは3月14日・15日に近い土日曜日に開催されるようになりました。

元来、近江八幡の左義長は安土城下で行われていたもので、城主であった織田信長自らも踊り出たと伝えられています。織田信長亡き後、八幡山城下に移住してきた人々は、既に4月に行われていた八幡まつりに参加を申し入れましたが、松明の奉納場所が無く、新参とのことで断られたため、これに対して、安土で行われていた左義長まつりを始めたことが起源とされているとも伝えられています。

左義長の制作

左義長は松明、ダシ、十二月(赤紙)の3つの部分を1本にし、前後に棒を通し、つり縄で括り固め神輿のように担ぐように造りあげます。(これ全体を左義長と呼びます)

町内の人々の手作りにより、約2ヶ月間かけてその年の干支に因んだ物を主としてテーマを決めて制作されますが、この素材が、穀物(大豆、黒豆、小豆、胡麻等)や海産物(鰯節、昆布、するめ、干魚等)などの食物を使って、その素材の色を活かして作り上げることが大きな特徴です。

左義長まつり日程

- ### 3月14日(土)
- 12:30 ~ ● 左義長宮入(日牟禮八幡宮馬場にて)
※奉納されるダシが一同(13基)に会します。
 - 13:00 ~ ● 渡御神幸祭(日牟禮八幡宮本殿にて)
※出発前に役員が整列し祭礼を執り行います。
※この際、左義長ダシコンクールの審査も行われます。
 - 13:30 ~ ● 渡御出発(-----)のコース
※渡御とは、神社祭礼で御神霊が神輿などで巡行すること。
※馬には神主や祭運営委員会名誉会長(近江八幡市長)が乗り、猿田彦・太鼓が進み、赤紙を持った御稚児さん、その後各町の左義長が続きます。
 - 14:15頃 ~ ● 八中太鼓演奏(白雲館前にて) 雨天中止の場合あり
 - 17:00頃 ~ ● 渡御帰着・渡御還幸祭
 - 17:30頃 ~ ● 左義長ダシコンクール審査発表・表彰式(日牟禮八幡宮能舞台にて)
 - 18:00 ~ ● 左義長宿入り・左義長ダシ飾り(各左義長宿★印にて)
21:00 ※天候や町内の都合によって変更されます。
- ### 3月15日(日)
- 10:00 ~ ● 左義長大祭(日牟禮八幡宮拝殿にて)
※本殿にて宮司が祝詞を奏上し、雅楽で巫女が舞を奏します。なお、祭りの間に拝殿に神輿が飾られます。その神輿の周りで、列席する役員や各町内の方々々が玉串を捧げ参拝されます。
 - 午前中 ~ 夕方 ● 左義長自由げい歩 町内を自由に練り歩きます。
※日牟禮八幡宮馬場を中心に組み合わせ(ケンカと呼ばれるダシ同士のぶつけ合い)が行われます。
 - 18:00 ~ ● 鳥居前「廻れ廻れ(マッセマッセ)」
※奉火の順番に従って順々に日牟禮八幡宮を目指します。
 - 20:00 ~ ● 左義長5基一斉奉火
 - 20:20 ~ ● 奉納順の6番以下順次奉火
 - 22:40 ~ ● 最終の左義長の奉火



駐車場のご案内

14日(土)	15日(日)
1 市役所臨時駐車場(無料)・・・特に時間指定なし	1 市役所臨時駐車場(無料)・・・特に時間指定なし
2 市営小幡観光駐車場...9:00~17:00(500円) 17:00~無料	2 市営小幡観光駐車場...9:00~17:00(500円) 17:00~無料
3 多賀観光駐車場(あきんどの里)...9:00~19:00(500円)	3 多賀観光駐車場(あきんどの里)...9:00~21:00(500円)

あづち信長まつり武者行列について

近江八幡の「左義長まつり」は、天正9年(1581年)に信長公自ら参加されたことを起源とし、安土城廃城後は八幡城下にて執り行われるようになりました。本年は、安土城築城450年を記念して、11月14日・15日の「あづち信長まつり」にて、左義長の里帰りを予定しています。

今回の左義長まつりにおいては、あづち信長まつり武者行列隊が約80名の規模で行列を行いますので、是非、ご観覧ください(写真撮影歓迎13:00~15:00頃迄) ※雨天中止

行程: 市営小幡P→新町通り→八幡堀(新町浜)→日牟禮八幡宮→ヴォーリス像→新町通り→市営小幡P

左義長まつり テレビ放送のご案内

- 生中継 3月15日(日) 19:00~21:15 (ZTV 全局生中継放送)
- 再放送 3月22日(日) 13:00~15:30
29日(日) 13:00~15:30

※県内3局(八幡・滋賀・彦根)同日同時

ZTVコミュニティチャンネル11cha

戦国ディスカバリー-滋賀・びわ湖

2026年は、安土城築城450年、NHK大河ドラマ「豊臣兄弟!」の放映などがあることから、滋賀県では、県全域で「滋賀の戦国」をテーマとした観光キャンペーン「戦国ディスカバリー-滋賀・びわ湖」を展開しています。

2026年12月迄の期間中、滋賀県内にて各種イベントが実施されますのでお楽しみください。

https://sengoku-discovery.biwako-visitors.jp/

2026年
安土城築城450年

※あかこんバス/まつり期間中、あかこんバスは、一部バス停に停車しませんのでご注意ください。詳しくは市民バス運行管理室(0748-36-5780)までお問い合わせください。*日曜日は運休
※日牟禮八幡宮までは近江八幡駅北口から近江鉄道バスにて約7~8分、徒歩で約30分かかります。詳しくは近江鉄道バスHPをご覧ください。(https://www.omitudo.co.jp/bus/timetable) ※左義長まつり両日は臨時バス等により増便されます。(近江鉄道バスあやめ営業所 TEL077-589-2000) ※当情報は3月3日現在のものです。

令和8年(2026年) 左義長ダシ説明

奉納町	命題 / 【製作者】	材 料	制作の意図の説明
第一区	雄風白馬 【第一区有志会】	ジュート麻、あられ、寒天、青海苔、クコの実、パスタ、うどん、パン粉、紫芋、黒豆、タピオカパール、海苔、一味唐辛子等	百人一首には相手への思いを表した歌が書かれており、このような願いや思いを馬にこめ、神社に奉納したことが絵馬の起源とされています。願いを乗せた白馬が駆け抜け、回り続ける風車と独楽は時の流れを表現しました。未来へ進む白馬の躍動を重ね、皆様の願いを込めて奉納いたします。
第二区	天下統一の夢 【第二区】	羊毛、友白髪、鰹節、いりこ、小豆、クスクス、ひじき、コーングリッツ、あられ、黒胡麻、海苔、一味唐辛子、寒天	織田信長の掲げた「天下布武」が安土城の築城から始まると共に城下町で行われた左義長まつりは、信長自身も参加したといわれています。現代では幻の城となってしまった安土城ですが、左義長まつりは今も尚引き継がれ、今年の安土城築城450年を記念し、左義長を愛した織田信長をモチーフにしたダシを奉納します。
参和会	神馬馳走 ～萬願成就への祈りと報恩～ 【参和会】	友白髪、干瓢、海苔、唐辛子、もち米、寒天、昆布、鰹節等	古来、絵馬や祈祷札は幸運を願う証とされてきました。本年は切実な「願掛け」の想いを、大地を力強く「駆け」る神馬に託します。この白駒は希望の象徴であり、萬願成就への祈りと報恩の心とともに歩みを進めます。福を呼ぶ蹄の音を湖国に響かせ、安寧とさらなる発展を願い奉納します。
仲屋町	天下布武の早馬 ～ Imagine ～ 【仲屋町】	みかん、豆板醬、友白髪、椎茸、昆布	450年前、信長は平安楽土の地に城を構え天下布武の拠点とした。それは、本来、城が持つ防御機能という意味は薄れ、政治文化の中心として平和な世の中を創造するという彼の強い意志のシンボルであった。そして人が集い町ができ、祭りが始まる。時を越え天下布武の真の意思を伝える早馬が駆け巡る。世界へ、あなたの心へ。
為心町	不倒飛躍 ～瓢箪から左馬(駒)～ 【為心町】	友白髪、昆布、スルメ、人工フカヒレ、桜エビ、本枯節、あおさ粉、紫芋粉、白あられ、干瓢、精麻、焼海苔、黒烏龍茶、すり胡麻、唐辛子等	本年のダシは「瓢箪から駒」を題材に、透かしの瓢箪から厄難を破り、慶福を導く「左馬」が躍り出し、未来へ駆け上がる白馬を製作しました。背景の凧は気運上昇、麻の葉文様の扇面は生命力と繁栄を象徴しています。万物が芽吹き成長する「丙午」の年。令和八年がこの上ない飛躍の一年となる様、祈念して奉納いたします。
宮内町	江州蒲生郡八幡町 惣絵図双六 【宮内町】	麻、煎胡麻、鱈シート、小松菜の種、昆布、海苔、スルメ、干瓢、唐辛子ローリエ、米あられ、梅シート	楽市楽座や方格状の町割など、安土城下を経済と文化の交流点とした信長公の遺志は、秀次公により八幡山城下に受け継がれ近江商人の源流となりました。両君の精神を宿す八幡の町は風光明媚な名地として今も栄えます。名君の葦毛の愛馬は双六の目を進むが如く、天下奇祭で賑わう城下に地福円満あれと蹄音軽やかに闊歩します。
魚屋町	鷲馬十駕 【魚屋町青年部】	緑豆、赤寒天、一味唐辛子、青海苔、焼き海苔、とろろ、昆布シート、パン粉、黒ごま、金箔、ともしらが	「才のある者は鍛錬を怠る、自惚れる、しかし、才がない者は日々努力する」信長公が遺したこの言葉の意味は、太田牛一が記した『信長公記』にも随所に刻まれている。そして、その言葉は時代を越え、現代の私たちに努力の尊さを教えてくれる。魚屋町は“鷲馬十駕”の精神で惜しみなく努力を続ける人々に敬意を込めて奉納します。

Welcome to Omihachiman

The historic district of Omihachiman centers on the old town just south of Mt. Hachimanyama. The building of a castle on the mountain's summit in the late sixteenth century sparked the town's development into a flourishing commercial hub. Between the mountain and the town is the Hachimanbori Moat, formerly a key transportation route between the town and Lake Biwa. Alongside the moat and toward the south stand the residences and storehouses of the merchants who brought prosperity to Omihachiman during the Edo period (1603-1867) by selling local wares throughout the country. Scattered among the traditional townhouses are a number of early twentieth-century Western-style buildings, most of them the work of William Merrell Vories (1880-1964), an American-born architect and missionary who settled in Omihachiman. Vories is remembered for his wide-ranging contributions to local life. The compact old town is laid out in an orderly grid pattern and easy to explore on foot.

Sagicho Festival

The Sagicho Festival is a colorful and dramatic celebration with more than four centuries of history. The festival is held annually in Omihachiman to mark the advent of spring and features parades of 8-meter-high floats, which are decorated with figures of the year's Chinese zodiac animal sign. Lively groups wearing colorful coats carry these floats about the town and engage in trials of strength called kenka, in which pairs of floats are pushed against each other until one topples over. At the climax of the festival, the floats are burned as offerings to the deities, and participants dance around the flames. The Sagicho Festival is an expression of both community pride and Omihachiman's mercantile heritage: each float is made and carried by residents of a specific neighborhood, and the flamboyant appearance and grand scale of the floats were historically made possible by the wealth of the town's merchant families. The festival, which has been named a National Intangible Folk Cultural Property, takes place over two days on the weekend closest to March 15.

奉納町	命題 / 【製作者】	材 料	制作の意図の説明
新町通り	神馬安寧 【新翔会】	唐辛子、田作り、金柑、ゴマ、一味唐辛子、海老煎餅、寒天、春雨、スルメ、干瓢、みじん粉、緑米、赤米、押し麦、蟹、アオサ、タピオカ、板とろろ、エイヒレ、岩海苔	中央に据えし馬は、天翔ける勢いと勇壮さを象徴する瑞兆。その姿に馬頭観音の加護を重ね、煩惱を断ち災厄を祓う願いを込めました。連なる数珠は人々の思いを結び、舞い飛ぶ蜂は豊穰と繁栄を告げる吉兆。「災い」を「転機」へと変える跳躍にあやかり、地域の安寧と皆々の飛躍発展を祈念し、ここに奉納いたします。
紫竹会	瑞祥隆盛 【紫竹会】	麻、はるさめ、ひじき、干瓢、焼海苔、スルメ、ガム	安土城築城450年を祝して、織田信長の家紋を題材としました。すかしの模様として、吉兆を象徴する鶴と亀をあしらひ、長寿繁栄と天下泰平への願いを込め、成功の意味を持つ鯉を表現し、左義長祭りの無事奉納やみなさんのこれからの成功の祈りを込めて制作し、奉納致します。
本町	旅路 【本町青年会】	友白髪、パン粉、ザラメ、一味唐辛子、あおさ、なんば(とうもろこしの種)、スルメ、黒米、ほうれん草	近江八景には、四季折々の湖国の姿が描かれるとともに、一日の移ろいや四季の循環が映し出されています。本作では、巻物に記された近江八景の情景を、黒馬が旅をする姿を制作しました。巡りゆく季節の中で、皆様の明日が希望に満ちた輝く色で描かれ、穏やかな日々へと続いていくことを願い、ここに奉納いたします。
池田町	馬九行久駆ける 背中に願ひとつ 【池田町】	麻、干瓢、梅干し、あられ、胡麻、もち米、パン粉、ひじき、ゆかり、パスタ、鰹節、海苔、紫芋、昆布	人々はどんな時でもご神徳によって困難を乗り越え、前向きに歩む力を授かっている。本年は、馬に信仰の強い京都藤森神社のご神徳(御朱印と御守)のご利益を背に、前進、飛躍する馬を表現し製作した。不安取り巻く社会情勢の中でも、一人ひとりが飛躍を願い、馬の様に一生懸命駆け続けていけばきっとうまくいく。
十區會	革新と破壊の英雄 ～四百五十年の時を越えて～ 【十區會】	黒豆、あおさ、梅ミンツ、海苔、花あられ、友白髪、パスタ、干瓢、ひじき、ザラメ、寒天、梅干し、スルメ、昆布、麻	安土城築城四百五十周年への熱い想いを込め、織田信長をモチーフに制作したダシです。天へ躍り上がる黒馬は乱世を駆け抜けた革新の象徴。巻物に記した「人間五十年」の歌が覚悟を響かせ、扇子に描いた鷹が鋭い志を示し、高く翻る旗は天下布武の夢と未来へ挑む熱き心を力強く伝えていきます。歴史と郷土愛を表現した記念作品です。
第十一区	白馬「鬼葦毛」 【第十一区】	黒豆、大豆、ポップコーン、ブラックベッパー、コーングリッツ、あおさ、黒海苔、白板昆布、干瓢、友白髪、黒昆布、プルーン、ガム、小豆、フカヒレ、ライスペーパー、寒天、紫芋、田作り、スルメ、一味唐辛子、白麦	武将・織田信長は馬好きとして知られ、京都馬揃えで披露した「鬼葦毛」は、力強さで名高い名馬でした。また、日本の伝統文化である屏風には、縁起の良い吉祥の象徴として馬や富士山が数多く描かれ、人々に親しまれてきました。本年は屏風に勇ましい「白馬」をあしらひ、物事がウマく進むよう願いを込めて制作・奉納します。